

台湾侵攻6

日本参戦

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

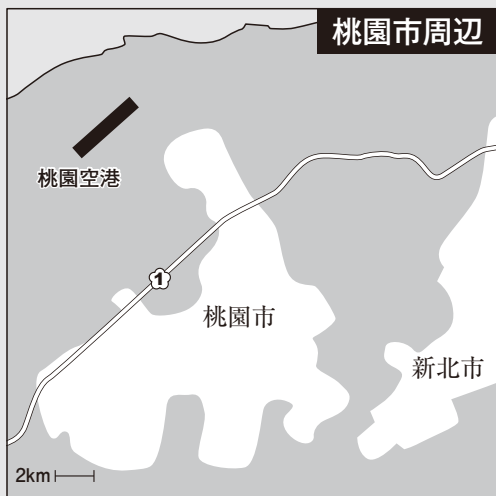
口絵・挿画
地図
平面
迷惑
星

安田忠幸

目次

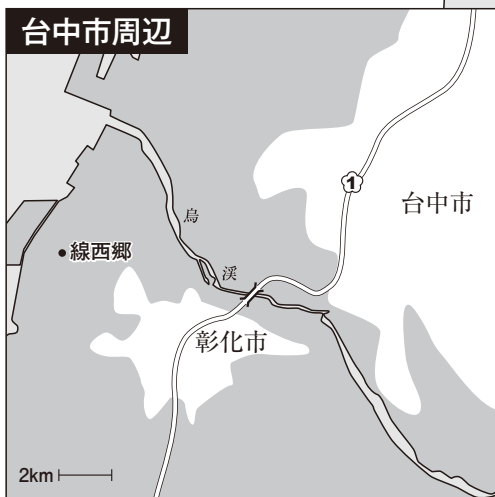
プロローグ	13
第一章 無防備都市宣言	22
第二章 略奪者	41
第三章 反転攻勢	69
第四章 少年烈士団	96
第五章 ニイタカヤマノボレ	121
第六章 空母機動部隊	146
第七章 突破者	168
第八章 蠅の王	190
エピローグ	203

桃園市周辺



台湾周辺地図

台中市周辺



登場人物紹介

◆日本

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

と土門康平 陸将補。水陸機動団長。

《原田小隊》

はら だ たく み原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

はたけともゆき畑友之 曹長。小隊ナンバー 2。コードネーム：ファーム。

たかやまけん高山健 一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ大城雅彦 一曹。コードネーム：キャッスル。

まちだ はる お待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしん た田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ がし ひろ み比嘉博実 三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

《姜小隊》

かんあや か姜彩夏 三佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課。

い い かける井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

〔訓練小隊〕

あま り ひろ し甘利宏 一曹。元は海自のメディック。

《水陸機動団》

し ば ひかる司馬光 一佐。水陸機動団教官。コードネーム：女神。ヴィーナス

つかぎきせい や塚崎誠也 一佐。新任の副団長。

はく げ ざう白馬剛 一佐。第一機動連隊連隊長。

●海上自衛隊

《第一護衛隊群》イージス護衛艦“まや”（10250 トン）

くにししゅん じ國島俊治 海将補。第一護衛隊群司令。

うめはらとくひろ梅原徳宏 一佐。首席幕僚。

●航空自衛隊

《総隊司令部》

まるやまたく み丸山琢己 空将。航空総隊司令官。

は ぶ みねみつ羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。

き だ けわ喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。横田出身で、父親が空軍将校で、イラクで戦死した。

〈警戒航空団〉

と がわけい こ

戸河啓子 空自二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

・第六〇二飛行隊

うちむらたいじ

内村泰治 空自三佐。第六〇二飛行隊副隊長。イーグル・ドライバー上がり。

・第三〇八飛行隊

お ききみちのぶ

尾崎路伸 空自二佐。飛行隊隊長。

きりゅうすはる

桐生 昂 一尉。コールサイン：コブラ。

みや せ あかね

宮瀬 茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。

・第三〇七臨時飛行隊

しんじょうあい

新庄 藍 一尉。F-15EX “イーグルII” 戦闘機乗りとして驚異的なキル・

スコアを誇る。TACネーム：ウィッチ。

（航空集団）

ひのうえこうた

樋上幸太 空自二佐。P-1哨戒機のパイロット。

●防衛省

うしじまやす お

牛嶋保夫 陸上幕僚長。陸将。

〔海幕防衛部〕

ふくはろくにひこ

福原邦彦 二佐。海幕防衛部装備体系課付き。前職は護衛艦の艦長。航空隊
総司令部のエイビス・ルームに参加。

●内閣

あ そう し ろう

阿相士郎 総理大臣。

●コンビニ支援部隊

こ まちみなみ

小町南 女子大生。中国語を勉強中のコンビニのアルバイト。

しもやまゆうすけ

霜山悠輔 桜会のコンビニの助っ人。190センチ近い大男。

ち ねん

知念ひとみ 小学生の娘の修学旅行費を稼ぐために参加した、流ちょうな

英語を話せる女性。

いしづかひろよし

石塚宏悦 知念とコンビを組む。

い どう ひろし

井藤 浩 元陸自一佐。情報工学博士。指揮幕僚過程出身。

///◆アメリカ////////////////////////////////////

●空軍

エルシー・チャン 少佐。ハワイ州空軍パイロット・中国系。

◆中国

●人民解放軍総参謀部

ソンヨウゴン
孫友剛 陸軍少将。総参謀部第一部所属。

リンホウ
林紅 陸軍中佐。対日作戦部の三番手。

●陸軍

《第7空中機動旅団》

フーパイリン
傅柏霖 中佐。一個中隊を率いる。ヘリパイ上がり。

ドンフイミン
薰慧敏 少佐。傅柏霖率いる中隊の副隊長。

〈下駄部隊〉

ディンジョンウェイ
丁仲維 大佐。大隊長。

ジョウソンイン
周松蔭 中佐。大隊作戦参謀兼副隊長。

●海軍

《第164海軍陸戦兵旅団》

ヤオイエ
姚彦 海軍少将。第164海軍陸戦兵旅団を率いる。

レイイエ
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

チェンシュアイ
程帥 中尉。専門の技術将校兼雷炎大佐副官。

・KJ-600（空警-600）

ハオフエイ
浩菲 海軍中佐。空警-600のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

・Y-9X哨戒機

チョンクイラン
鍾桂蘭 海軍少佐。AESAレーダーの専門家。

●中南海

パンホンタ
潘宏大 中央弁公庁副主任。

●S機関

ツァンガオユエン
張高遠 博士。数理データ・サイエンスの若き天才。

◆台湾

●陸軍

《第10軍団》

ライルオイン
賴若英 中佐。作戦参謀次長。

《第234機械化歩兵旅団》＝別名〈長城部隊〉
チャンチャン

ファンジューヤン

黄九雲 中尉。本部管理中隊所属小隊長。

フーティエンヨウ

胡天佑 伍長。小隊マークスマン。

《陸軍第601航空旅団》＝別名〈龍城部隊〉

ランチャーリン

藍志玲 大尉。戦闘ヘリ・パイロット。コールサイン：マリリン。

ティエンズーイ

田子瑜 少尉。新米仕官。藍志玲大尉と前席射撃手として組む。

●海軍

《第168艦隊》

ジンシンハオ

鄭英豪 海軍大佐。蘇澳基地司令。

ライグオワイ

賴國輝 中佐。海軍作戦本部参謀補佐。陸軍第10軍団の賴若英中佐の弟。

《台湾海巡署》六〇〇トン型巡視艇一番艇“安平”（満排水量750トン）

コンジン

孔竟 中佐。“安平”船長。

●空軍

リーイエン

李彦 空軍少将。第5戦術戦闘航空団（花蓮）を指揮する。

ホンユーティエン

洪予天 空軍大佐。要撃管制官チームを率いる。

リウジェンホン

劉建宏 空軍中佐。第17飛行中隊隊長。

●その他

〈桃園の郷土防衛隊〉

リーグワンション

李冠生 陸軍少将。金門の烈嶼守備大隊の指揮官を歴任。

ヤンシージョン

楊世忠 少佐。軍歴三十年で孫もいるベテラン。

リンイーシアン

凌以翔 伍長。H&kのG 28狙撃銃を使う狙撃手。

〈国土防衛少年烈士団〉

チェンイーピン

陳一兵 少尉。徴兵後に小学校の教師になり、教頭として退職。

タダケンすけ

依田健祐 父親は日本台湾交流協会参与。私立中学校（国民中学）の生徒。

ガオウェンディ

高文迪 依田健祐の親友。外科医の父を持ち、クラスのリーダー格。

ルーイー

呂宇 私立中学校（国民中学）の数学教師。

ドンウェンシン

董文信 台中市長。

ファンキンチン

范晴晴 台湾・桃園のコンビニ店店長兼本部幹部社員。

台湾侵攻6

日本参戦

プロローグ

リーグワンション
李冠生元陸軍大佐を乗せたハンビーは、国防
部裏の劍潭山^{ジエンタンシヤン}を途中まで登ると、森の中の墓地
の入り口で止まった。大佐を連れてきた若い中尉
は、そのまま墓地の奥まで歩くよう伝えた。そこ
でまた次の案内人がいるはずだからと。

まっすぐ歩くというわけにはいかなかったが、
道なりに歩くと、トンネル状の入り口があり、苔
むした扉の上の藪の中に、ギリースーツに身を包
んだ陸軍の狙撃兵が隠れているのがわかった。

ドアが内側から少しだけ開き、中から手招きさ
れた。

見るものが見れば、これが防爆ドアということ

はすぐわかるだろうが、一般人が見ても、墓の掃
除用具でも仕舞ってあるちよつとした横穴にしか
見えないだろう。

トンネルに入ると、頭上から白いLED電球が
下がっている。エアコンも動いているらしく、ド
アが開いた瞬間、内側から風が出てくるのがわか
った。

壁には、戦況を報告する貼り紙が貼ってある。
今朝、桃園市^{タオユエン}で撮影されたい、総統府の閣
僚面々の写真もあった。皆笑顔だった。

コンビニの前で、その店員らと撮ったらしい。
台湾の健闘を称える各国指導者のメッセージも、

中文に翻訳された紙が貼つてある。欲しいのは、美辞麗句を並べた声援では無く、武器弾薬と兵隊だったが……。

かつて、金門防衛指揮部で烈嶼守備大隊を率いたこともある李大佐は、引退して静かな余生を過ごしていた淡水地区^{タンシユイ}で、上陸してきた解放軍精銳部隊を、郷土防衛隊の寡兵を率いて戦う羽目になった。それも背広姿のまままで。

幸運にも、上陸した先の陽明山^{ヤンミンシャン}で、海兵隊部隊が再編成中だったため、どうにか撃退することが出来たが、犠牲は大きく、危うい所だった。

いずれにせよ、敵の奇襲攻撃をしのぎ、自分としては、瓦礫の後始末など、民間防衛団体でも可能な仕事を片付けるだけでお終いだと思っていた。銃は捨てたつもりだった。それも、消防隊他がまともに機能すれば、自分のような老いばれの出番も無い。あとは、軍の現役部隊の活躍を信じ、こ

の電気も水道も止まった中で、ご近所さんと窮乏生活を耐え抜くのみだ。

だが、今朝方、新品の戦闘服とともに、国防部へ出頭せよとの命令が届いた。軍の車両を乗り継いで国防部へ出頭したら、この裏山へと案内されたのだ。

人二人が通るのがやっとの幅だったトンネルは、角を曲がる度に大きくなった。天井も高くなり、最後には車一台が十分対向できるような幅に広がった。天井の高さも三メートルはありそうだ。

兵士の往来も多くなった。ほとんどが士官だ。それも陸海空海兵隊の高級士官が歩き回っている。まるで、うちの軍隊は士官ばかりで兵隊はいないのか？　と思うほどだった。

階級章の無い李を訝しむ者もいたが、彼が何者かに気付いた陸軍の兵士らは、一瞬はつとして立ち止まり敬礼を捧げた。

海兵隊衛兵の数も増えてくると、道は下りスロ
ープになり、台湾国防部地下軍事司令部の最深部
へと到着した。オペレーション・ルームを一瞥す
ると、国防部長の谷進強^{フジシヤウ}が暗闇から現れ、隣室
へと誘った。国防部長は海兵隊の戦闘服姿だった
が、階級章は無かった。

小会議室だが、壁のモニターには、無人機が撮
影する戦場の景色が映し出されていた。

「ご無沙汰しております。李大佐。確か、最後に
お目に掛かったのは、大佐殿の退役パーティーで
したな」

「覚えているよ。なんで海兵隊の若造がこんな所
に顔を出しているんだらうと」

「ええ。国内の状況にも目配りするのが情報部の
任務ですから。国防部の地下指揮所はあまりに危
ないということで、ここを開ける始末になりました。
淡水の戦いはお見事でした。大佐があの場合に

いなければ、防衛隊は総崩れになり、防御ライン
を抜かれていたことでしょう」

「犠牲は大きかった。郷土防衛隊の二個中隊が全
滅だぞ。普段、買物に行けば挨拶してすれ違う
連中が、私の命令で死んだのだ。喜ぶ気にはなれ
んな。この写真はいったい何なのだ？」

と李は、コンビ二前で、総統が微笑む写真に目
をやった。

「貴方の責任ではない。桃園の状況が改善したと
いうニュースはお聞きになっていませんか？ 昼
間は電波状況も悪くて、NHKラジオもなかなか
聴き取れないから、情報拡散の改善が必要ですね。
日本から、衛星携帯や蓄電池を持ったコンビ二部
隊が桃園に入り、昨夜、街に灯りを点しました。

それこそ、隣のコンビ二と灯りを繋ぐことで、中
心部の治安をあっという間に回復させました。総
統閣下は、閣僚を連れて早速、視察に赴き、コン

ビニ従業員に感謝を述べた上で、欧米向けのメッセージも録画した。自分たちはこうして踏み留まっているよね」

「だが、台中を奪われた……」

モニターに映っているのは、その台中の状況だった。大きな河川が画面の奥にある。あれはたぶん烏溪^{ウーシー}だろう。その手前側、つまり台中市側で何カ所も火花が上がっていた。

「ええ。見事にしてやられました。解放軍は下駄部隊と呼んでいるらしいが、例の電動キックボード部隊と、ホバーバイク隊が突然、沖合に現れて上陸、あつという間に台中市へと進軍して街を占拠した。上陸した部隊の数は知れているから、こちらは数でプレスするしかない」

「街が廃墟になる」

「仕方ありません。総統ご一行の桃園訪問は、そのバッド・ニュースを打ち消すためのカウンター

でもある」

「状況は厳しそうだな。このスタッフも、^マ松代大本營^{シロ}へと避難させた方が良いのではないか？ 大陸から、地中貫通爆弾でも撃ち込まれたら保たないだろう」

「さすがにまだそこまででは無いが、もちろん用意はしています。自分が死んでも国防部長が第二指揮所で任務を引き継ぎます。それで……。新しい戦闘服の着心地はいかがですか？」

「こんなものを着て棺桶に入る気は無い。こんなジジイに何をさせようというのだ？ 淡水を襲った敵はどこへ消えた？」

「ええ。昨日は、陣取った金山^{ジンシャン}の温泉街で、ゆっくり湯船に浸かって寛いだみたいです。張り付いていた海兵隊部隊にも、無理に襲撃する必要はないと命じました。陽明山を巡る戦いでは、こちらの犠牲も大きかった。味方にも休息は必要で

す。陸軍と海兵隊で総勢一個師団が包囲しています。貴重な一個師団ですが……」

谷は、机の端に積まれた書類の束をどけて、小さなケースを手にした。

「おいおい、勘弁してくれ!——」

「いえ、実際、貴方の的確な指揮が無ければ、淡水を抜かれただろうことは事実で、陸軍はもとより海兵隊からも高く評価されています」

と谷はケースを開けて新しい階級章を出した。

「総統閣下から、本来なら自分でこれを付けてあげたいが、代理の仕事で済ますことを許してください」と

「元気な予備役ならまだ何十人もいるだろうに」

「淡水を救った英雄として貴方の名前は轟いている。それを利用しない手は無い。桃園の郷土防衛隊を指揮して下さい。正規軍部隊では無い。これなら李少将としても不満はないでしょう?」

「さつき、国防部の玄関で、若者が塹壕掘りしているのを目撃した。高校生という感じでも無かった。君らは中学生まで動員するほど困窮しているのか? 女子までいたぞ」

「国土防衛少年烈士団を名乗らせています。兵隊でなくとも塹壕掘りは出来る。重機も、それを動かす燃料も不足している。利用出来るなら砂場で遊んでいる幼児の手だって借りますよ。彼らにだって良い記憶になる。国の一大事に自分も貢献できた」と

「沖縄戦での、鉄血勤皇隊というのを知っているかね? あれと同じだな。これは負け戦になるぞ……。そもそも桃園に敵が進撃してくるには、まだそれなりの時間が掛かるだろうし、第6軍団がいるじゃないか?」

「昨夜の状況を考えると、抜かれる危険もあり得る。それに、総統府とも協議したのですが、われ

われはもつと先のことを考えています。万一、台北が敵の手に陥ちた後、貴方にゲリラ部隊を率いて非対称戦を繰り広げて欲しいのです」

「私はゲリラ戦の専門家ではない。君らは知らんだろうが、私が軍務にあった頃、解放軍はガタガタだった。腐敗し、装備は旧式で、渡洋能力も無かった。私はそんな時代に部隊を率いていたのだぞ。そもそも、ここ台湾でゲリラ戦は無理だ。こんな小さな島では、ゲリラが再出撃を繰り返す後背地もなく、弾の補給すらおぼつかない」

「仰る通りです。まさに、私が見込んだ通りの分析力だ。その無理な作戦を遂行できる指揮官は貴方しかない。郷土防衛隊に準備させつつ、ゲリラ戦の作戦も練ってもらいます」

「中学生を動員して、三峽で塹壕掘りをやれと？」

「必要ならやって下さい。われわれは海からだけ

でなく、空からの襲撃にも備えなければならない。解放軍の空挺部隊はまだ全く動いてませんからね。空港や空き地、平野部の至る所を掘り返して備えるしかない」

「日本やアメリカの協力を得るわけにはいのか？」

「もちろん働き掛けています。アメリカは、少数の海兵隊部隊がすでに入っているし——」

「そう言えば、淡水駅で、自衛隊の特殊部隊と遭遇した。指揮を執っていたのは、全くネイティブな北京語を喋る女性だった。彼らの助けがなければ、われわれは崩壊していた」

「はい。司馬大佐ですね。彼女とその部隊は、ちよつと特殊とか、本来は、逃げ遅れた日本人を救出するための部隊です。ベトリオット部隊が日本から入ることになっていますが、自衛隊版海兵隊が入るまで、あと一步でしょう。さすがに彼

「そも、台中陥落は深刻に考えるでしょうから」

「そもそも論に拘って何だが、どうして第2梯団を抵抗もせず上陸させたのだ？」

「そんな戦力は無かった……。みんなからそれを責められるのですが、問うべきは、なぜ第1梯団の潰滅に拘ったのか？ です。やってきた場所は新竹^{シンヂュー}ですよ。いきなり、台湾^T積体^S電路^M製造^Cの本拠地に上陸してきた。われわれとしては、国力の全てでもって迎え撃つしか無かった。幸い、想定したより遥かに良い結果でした。二万もの兵を全滅させた」

「台南にはそこまですて守る価値は無かったか……」

「何ごとにも優先順位はあります。しかし、第2梯団の補給は絶っている。敵の本隊は濁水溪^{ジュオシュイ}を渡ったわけでもない。彼らの全戦力の、せいぜい十分の一が台中に押し入ったに過ぎない。桃園の

状況を、一通り視察して下さい。感動しますよ」

谷は、待機させていたカメラマンを招き入れると、陸軍少将の階級章を自ら李の肩に付けた。

「貴方は有名人だ。狙撃兵に狙われないように、外に出る時は変装した方が良いでしょうね」

撮影が終わった途端、谷は、その階級章をベルクロで隠した。

「人材は好きにさせてもらって良いかな？」

「もちろんです。貴方が欲しい人材ならこの参謀スタッフだろうと、八〇歳過ぎの爺さんだろうと好きに呼んで下さい。部隊が渋ったら私が命令します」

李少将は、トンネル伝いに国防部ビルへと戻ると、心当たりのある人材をメモ書きし、ただちに桃園の郷土防衛隊本部に出頭するよう手配させた。たぶん、全員をかき集めるには、一日二日はかかるだろうが、それまでは、第6軍団が支えてく

れるだろう。そもそも、台中が陥落したとは言え、そこから新竹まで八〇キロ、更に桃園までは四〇キロだ。

新竹までは、海岸線まで迫る山岳部の突破もある。

敵がそこを突破するには何日も、あるいは何週間も掛かるだろう。備えるべきは、第3梯団の、直接的な上陸と、空挺作戦だ。

台湾の制空権が復旧しつつあるとはいえ、空からの急襲は、やろうと思えば不可能では無い。部隊が到着する、そのほんの前後だけこちらの航空優勢を崩せば良いのだから。

解放軍はきつとそういう手を使い、新竹や桃園周辺を急襲して、さらにこちらの防衛力の分断を図ってくるのだだろう。われわれはそれに備えなければならぬ。

解放軍部隊が台湾本島南西に浮かぶ東沙島トンシャダオを奇襲上陸してから一八日が経過しようとしていた。戦線は尖閣諸島へと拡大したが、日本は大つぱらには中国との戦争発生は認めず、無人島での死闘を国民に隠し続けた。結果として陸上自衛隊は、百名にも及ぶ犠牲を払いつつ、この撃退に成功したが、日本政府はその事態の責任を取り、内閣は総辞職した。

解放軍は尖閣諸島奪取の目的を果たすことは叶わなかったが、その作戦を大成功と評価し、満を持して、台湾本島への上陸作戦を開始した。同時に、日台両国に対して苛烈なサイバー攻撃や破壊工作を行い、電力と通信網を完全にダウンさせた。日本に対しては、その台湾支援の動きを牽制するために、連日、首都東京への弾道弾攻撃を繰り返す。国民の絶望感を煽つていた。その弾道弾攻撃によって、民間人に夥おびただしい死傷者を出すに至つ

でも、日本政府は台湾防衛への参戦意図を明確にするのではなく、台湾は、米国の直接軍事支援も得られないまま苦しい闘いを続けていた。

その闘いは、台北から台南へ、そして台中へ。戦場を選ぶのは、つねに中国側だった――。

第一章 無防備都市宣言

解放軍下駄部隊を率いる丁仲維大佐は、市役所庁舎最上階の広間に設けた指揮所で、ドローンが送って遣^{よこ}す映像に見入っていた。

この一時間ですでに三機の偵察用ドローンを失っていた。台湾軍が対ドローン兵器を繰り出して来たことは明らかだった。恐らく電磁波タイプのものだろう。やむなく、ドローンをかなり後方に下げさせるしかなかった。戦場は遠く、その状況は双眼鏡で覗くのとたいして変わらないほどだった。

とはいえ、率直な所、ここまで作戦が順調に運ぶとは想定外だった。せいぜい、台中市役所の手

前で、郷土防衛隊が築いたバリケードに遭遇して、そこで撃ち合いを繰り広げるものとはかり思っていた。だが、昨日はあったバリケードはすでに撤去されていた。

聞けば、ここまで敵が押し寄せる心配は当面なものとは判断されて撤去したそうだった。

ドローン部隊はともかく、悩みの種だった武装ヘリ部隊は遠ざけた。侵攻直後、エクスカリバー砲弾が、恐ろしいまでの命中精度で味方陣地を砲撃してきたので、全ての陣地を、敵が砲撃を断念せざるを得ない民間施設に設置させた。避難民がいる小学校や、負傷兵や病人が動かせない病院、



そうやって、民間人を人質に取った。

軍人としては不本意だが、それが結局は、双方の犠牲を減らすことにもなる。事実、結果として、台湾軍の攻撃はほぼ収まった。ただ一箇所を除いて……。

台中市の南側を流れる大河烏溪の護岸地帯で、激しい戦闘が繰り広げられていた。ここには、ホバーバイク隊一個中隊が降り立って占領した。戦略上の要衝だ。橋は、この上流部にも何本も掛かっているが、街中を抜けて南へと移動する最も象徴的な場所で、台湾側としては、ここを無視するわけにはいかなかったのだろう。

大隊作戦参謀兼副大隊長の周松蔭中佐が、両手を腰に宛^{あて}がい、ふーとため息を漏らした。

「正直、民間人が寝たままの街を瓦礫の山にしてまで、敵が戦闘を繰り広げるとは考えませんでし
たね」

「歩兵だけでならともかく、対岸から戦車でバカスカ撃ってきて、アパートを骨組みだらけにしてだからな。敵にも、それなりの気骨のある指揮官がいるということだろう。仮に、あの場所に千人の民間人が暮らしていたとしても、軍としては早期に取り戻さねばならない場所であることは事実だ。私でもそれを命じるし、やれと言われれば、躊躇^{ためら}う理由はないな。それが指揮官の務めだ」

二人の背後から、作業服を羽織った壮年の男性が現れた。待ちくたびれたという顔をしていた。市長を待たせた詫びはないのか？ とその顔に描いてあった。

董文信市長、お待ちせして申し訳ありません。
戰場では、優先する問題が山積みでしてな」

「すぐ下の階にいた。挨拶くらいは出来ただろうに。軍政を敷かねばならん君たちにとつても、私との関係を構築するのは損なことではないと思う

が？」

「仰る通りです。しかし、軍政が必要になるほどの期間、ここに留まることになるかどうか……」

傲岸不遜、やり手だが、噂通りの男だと丁は思った。

「市長、自分は軍人なので台湾の国内政治には疎いのだが、貴方が次の総統選の有力候補だということは存じています。台北周辺より遅れた台中台南差別に終止符を打つというのがスローガンだとか？」

「そうだ。台北は産業を独占し、遅れた南部地域にあるのは農業ばかりだ。私が総統になれば、工業化する北部と取り残される南部という構造に終止符を打てる。君たちには関心の無い話だろうが、で、挨拶は終わりにして、実務の話に入りたい。

台中市長として、無防備都市宣言を行う。だから、市内での戦闘は止めてほしい。というか、これ以

上、必要は無い」

「無防備都市宣言ですか……。市長、国際法は若い頃学んだだけなのだが、少なくともその宣言は、通常、国家指導者によって為されるものではないですか？」

「残念だが、この街はすでに台湾政府によって支配されている。国家指導者の意志がどうあろうと影響は無いだろう。この街を守るために必要なことだ。解放軍にとっても利益はあるぞ。弾薬を温存できるし、何より、死傷者も出さずに街を支配できる。台中市は、解放軍を受け入れ、解放軍の指揮命令に従うことを約束したと大々的に宣伝できる」

「なるほど、それは考えませんでしたね。しかし、それは実行というか、実現できるお話ですか？たとえば郷土防衛隊にしても、貴方の指揮下にあるわけではないでしょう？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。